

博士論文（要約）

中国語の動詞接尾辞“V 过”の意味と機能に
関する研究—日本語との対照も兼ねて—

渡辺 昭太

■序章

本博士論文は、中国語の動詞接尾辞の一つであり、従来はアスペクト助詞と扱われてきた“V 过”に関して、その意味と機能について考察を行うものである。

まず序章においては、現代中国語における“V 过”の位置付けを述べると共に、他のアスペクト助詞との共通点及び相違点を確認し、先行研究における“V 过”の扱い方や先行研究の問題点などについて確認した。従来、中国語の動詞接尾辞“V 过”は、完了を表す“V 了”や持続を表す“V 着”と同じく、動作の時間的的局面を述べる「アスペクト助詞」であるとされてきた。しかしながら、“V 过”は、“V 了”や“V 着”にはない特徴を持っている。例えば、“V 了”や“V 着”は、否定副詞“没(有)”を用いた否定文には生起しない(即ち、“V 了”や“V 着”は“没(有)”とは共起しない)が、“V 过”は否定文でも生起するという特徴がある。例えば、以下の例がそれである。

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| (1) 【肯定】 他看了这本书。 | 【否定】 他没有看这本书。 |
| 【肯定】 彼はこの本を読んだ。 | 【否定】 彼はこの本を読んでいない。] |
| (2) 【肯定】 他看着这本书。 | 【否定】 他没有看这本书。 |
| 【肯定】 彼はこの本を読んでいる。 | 【否定】 彼はこの本を読んでいない。] |
| (3) 【肯定】 他看过这本书。 | 【否定】 他没有看过这本书。 |
| 【肯定】 彼はこの本を読んだことがある。 | 【否定】 彼はこの本を読んだことがない。] |

また、中国語では、時間に関して無標(ノーマーク)の動詞が連体修飾節に表れた場合、一般に已然の意味で解釈されやすく、完了及び持続といった「已然」の意味を表す“V 了”や“V 着”は連体修飾節には表れにくい。ところが、以下に示すように、“V 过”に関しては、連体修飾節にも自然に現れることができる。

- (4) 看这本书的人 cf. { *看了 / *看着 } 这本书的人
 [この本を { 読んだ / 読んでいる } 人]
- (5) 看过这本书的人
 [この本を読んだことがある人]

“V 过”は、その用法に関してもやや特殊な面がある。“V 过”は、前述の例(3)のように「経験」という意味を表すのがその代表的な用法であるが、以下のように何らかの出来事を「済ませる」という意味を表す用法もある。

- (6) 我吃过饭了。
 [私は食事を済ませた。]

また、「経験」を表す“V 过”と「済ませる」ことを表す“V 过”は、上記の意味的側面以外にも違いがある。例えば、経験を表す“V 过”は通常、“他去过上海。”[彼は上海へ行ったことがある]のように、“SV 过(O)”という文形式を取るのが一般的であるが、「済ませる」ことを表す“V 过”は、以下のように完了アスペクトの“V 了”と共に使用されたり、変化や新事態の発生を表す文末助詞の“了”と共に使用されることもある。上記(6)や以下の(7)がそれである。

(7) 咱们顶好还是吃过了午饭再继续干吧。

[我々はやはり昼食をとってから続けた方がよいよ。]

さらに、「経験」を表す“V 过”と「済ませる」ことを表す“V 过”は、否定文においても異なる振る舞いをする。否定副詞“没(有)”を用いて否定文を作る場合、「経験」を表す“V 过”は残存するが、「済ませる」ことを表す“V 过”は消えてしまう。以下の例がそれである。

(8) 他去过上海。——他没有去过上海。

[彼は上海に行ったことがある。——彼は上海に行ったことがない。]

(9) 他吃过饭了。——他还没有吃饭。

[彼は食事を済ませた。——彼は食事をまだ済ませていない。]

このように、“V 过”には異なる二つの用法が存在する。ただし、「経験」を表す“V 过”と「済ませる」ことを表す“V 过”には、共通する面もある。それは、いずれも「何らかの動作・行為が既に終わっており、かつ、動作・行為の発生に伴って生じた結果状態も既に消えている」ということを表す点である。以下の例(10)は「経験」の用法の例であるが、「中国へ行く」という行為、及びそれによって生じた結果状態(中国にいるということ)も既に終わっていることが含意される。例(11)は「済ませる」ことを表す用法であるが、会議の実施が既に終了していることを含意する。

(10) 她去过中国。

[彼女は中国へ行ったことがある。]

(11) 这个会开过三天了。

[この会議は終わって三日になる。]

このように、「経験」を表す場合でも「済ませる」ことを表す場合でも、「行為と結果状態のいずれも既に終わっている」ということを含意する点は共通している。

両者のいま一つの共通点は、その歴史的な由来である。両者はいずれも移動を表す動詞の“过”(「超える・過ぎる」の意)が文法化を経て派生したものであることが複数の先行研究で指摘されており、これも両者の共通点の一つである。

以上で確認したように、「経験」を意味する“V 过”と「済ませる」ことを意味する“V 过”の間には、相違点と共に共通点も認められる。しかしながら、現代中国語において、“V 过”は「経験」の意味で解釈される場合と「済ませる」という意味で解釈される場合があるのは事実であり、同時に、上述のような統語的な相違点があることもまた事実である。そこで本稿では、動詞接尾辞の“V 过”は形態素としては一つであると認識しつつも、現代中国語においては異なる二つの用法があると解釈し、各々の用法に関して、日本語との対照も交えつつ、第1章から第5章にかけて詳しく考察を加えた。

■第1章

第1章では、序章での確認を踏まえ、「経験」の意味を表す“V 过”に関して考察を行った。序章で確認したように、“V 过”には「経験」を表す用法と「済ませる」ことを表す用法があ

る。しかし、“V 过”が「経験」の意味で使用されているのか、「済ませる」という意味で使用されているのかに関しては、中国語話者の直感によって判断されてきた面があり、どのような場合に「経験」として解釈され、どのような場合に「済ませる」という意味で解釈されるかについては、十分に考察されてこなかった。そこで、まず先行研究で経験用法とされている“V 过”の用例を精査すると共に、筆者が独自に採取した用例の分析を通じて、中国語における経験とはどのようなものであるかを考察した。先行研究において、「経験」を表すとされる“V 过”の例としては、以下のようなものがある。

(12) 从前我在舞场的时候，他很追过我一阵子。

[以前私がダンスホールにいた頃、一時期彼は私を追いかけていたことがある。]

(13) 那救人的青年，曾经卑贱过，可在死的那一刻升华到了高贵。

[人を救ったあの青年も、かつては卑しかったが、死の瞬間には高尚になった。]

上記の例はいずれも、発話時から比較的遠く離れた出来事に関して述べられているものである。即ち、中国語においては、経験とは単に過去に起きた出来事ならば何でもよいというわけではなく、現在から見てかなり前（一般に、数ヶ月から一年以上前）の出来事、現在から見てある程度の時間的空白を意識できる出来事とその典型例であるということである。それに加えて、さらにもう一つ、出来事が「経験」として解釈されるための条件が存在することも明らかになった。それは、それ自身に情報価値がある、特別な出来事であるという点である。我々は、日々、様々な出来事に遭遇している。それらは、食事や通勤・通学といった習慣的・ルーチン的な出来事から、めったに遭遇しないような出来事まで多種多様であるが、経験として解釈される出来事は、単なる過去の一出来事ではなく、それなりに情報価値のある特別な出来事であると考えられる。以下のような例がそれである。

(14) 他说，听说这山上死过好多人。

[この山ではとても多くの人が死んだそうだと言った。]

(15) 事实上这几种差事他大半都担任过。

[実際に、これらの仕事のほとんどを彼はやったことがある。]

(14) と (15) の出来事は、いずれも頻繁には起きえないような、比較的珍しい出来事である。このように、出来事それ自身が本来的に情報価値を持つ、あるいは各々の文脈において情報価値を持つという条件が満たされることで、はじめてその出来事が「経験」として解釈されるようになるのである。以上から、発話時から比較的遠い過去の出来事で、かつ、それほど頻繁に起きえないような珍しく貴重な、情報価値のある出来事に“V 过”が付加された場合には、「経験」の用法で解釈されるようになると考えられる。

また、刘月华 1988 において、“V 过”の使用環境として、関連文が存在することが指摘されている点に着目しつつ、「経験」を表す“V 过”は人や事物に対する属性付与の機能を持つことを明らかにした。刘月华 1988 では、「経験」の意味で“V 过”が使用される場合には、必ず意味的に関連する文（関連文）が存在することを指摘し、関連文では物事の道理や人の性格・品性、能力や地位といったものが述べられるとしている。以下の例がそれである（下線

部が「関連文」)。

(16) “我吃过媒人的亏，所以知道自由结婚的好。”

[私は仲人に損をさせられたことがあるので、自由結婚の良さを知っている。]

(17) 你是知识分子，喝过墨水，起出名字来一定好听。

[あなたは知識人で、学問の経験があるから、きっと良い名前を付けられる。]

上記の例の関連文(下線部)で述べられる内容は、いわば人や事物の持つ性質である。即ち、人や事物が何らかの経験を有していれば、それに伴って何らか別の性質が備わるようになりやすいということである。ゆえに、経験を述べることで、人や事物の持つ本質的な性質を述べることにつながるのである。そうであるならば、「経験」とは人や事物が有する一つの「属性」と捉えることができると考えられる。よって、「経験」の意味で使用される“V 过”は人や事物に属性を付与する機能を持つと考えられるのである。“V 过”が属性付与の機能を担うと考えることで、否定文においても“V 过”が生起する理由も明らかになる。即ち、「経験」の意味で使用される“V 过”は単にアスペクトを表すのみならず、「属性」を述べる機能を有するからこそ、否定文にも生起し得るのである。また、刘月华 1988 は、「経験」を表す“V 过”の文と関連文の間には、因果関係が存在するとしているが、その因果関係とは、「属性が属性を導く」という観点から捉えられた因果関係であることも上記の考察を踏まえつつ併せて指摘した。

■第2章

第2章では、「何らかの動作行為を済ませる」という意味で使用される場合の“V 过”に関して考察を行った。先行研究において、「済ませる」ことを表す“V 过”の用例として挙げられているものには、以下のようなものがある。

(18) 他们在韩老家吃过了饭，又看了电视，才道别回家。

[彼らは韓さんの家で食事をし、テレビを見てから、ようやく別れて帰宅した。]

(19) 等我问过了再告诉你。

[私がたずねてから教えてあげてる。]

これらの“V 过”は完了アスペクトの“V 了”と意味的に類似しているという指摘もあるが、“V 过”と“V 了”という二つの形式が存在し、さらに両者が共起することもある以上、やはり“V 过”と“V 了”には意味的な相違点があると考えるのが妥当であると思われる。そこで、先行研究の例文を精査すると共に、新たにコーパスから用例を採取し、“V 过”の表す「済ませる」という意味の内実について詳細に考察した。その結果、以下のことが判明した。“V 过”の表す「済ませる」という意味は、「行う必要がある行為を済ませる」あるいは「行われることが想定されることが済む」ということである。以下のような例がそれに該当する。

(20) 他突然转向我的母亲说：“您最近写的那部小说我读过了。我要坦率地说，有一点您写得不准确。…”

[彼は突然母の方を向いて言った。「あなたが最近書いたあの小説、読みましたよ。率直

に言えば、ちょっと不正確な部分がありますね。…」]

(21) 林荣明看看表，料定家里已经吃过饭了，就转身进了公园。

[林荣明は時計を見ると、家ではもう食事は済んでいるだろうと思い、公園に入った。] 「行ふ必要がある行為を済ませる」あるいは「行われることが想定されることが済む」というのは即ち、「必然的に発生が予測できる予定性のある事態の遂行」という意味であり、本稿ではこれを“V 过”の「予定遂行用法」と名付けた。

また、「予定遂行用法」の“V 过”は、対象となる出来事が現在から比較的近い時間帯に起きるのが一般的であることも併せて指摘した。上記の(20)及び(21)はいずれも発話時から時間的に近い出来事である。これは「済ませる」という行為そのものの意味と関係していると考えられる。一般に、「済ませる」というのは、発話時に比較的近い行為が対象となるものである。さらに、発話時からの時間的近さという点は、先に確認した「予定性」の観点とも整合性があると考えられる。通常、発生が予定される出来事とは、発話時からそれほど時間的に離れているとは想定しにくい。どれほど条件が整っていても、通常は現在から遥かに遠い時点の出来事の発生を予測するのは困難である。そのため、いきおい「予定遂行用法」の“V 过”は、発話時から比較的近い出来事に対して使用されやすくなるのである。さらに、「予定遂行用法」の“V 过”は、完了アスペクト助詞の“V 了”と共に起ると「強調」の意味を表すとされてきたが、「予定を遂行すれば十分満足できる状態に至る」という含意が生じるため、そのような意図が汲み取れることも併せて指摘した。

加えて、これまでにあまり指摘されなかった現象として、「済ませる」ことを表す“V 过”と複数を表す表現（全称量化表現、該当事物の列挙表現、量的な観点からの連用修飾表現）との共起がある。以下の例がそれである。

(22) 开会，办班，学习，检查，所有惯用的办法都用过了，但公司面貌依旧，亏损依然。

[会議、セミナー、勉強、調査、あらゆる常套手段はすべて用いたが、会社の状況はちっとも変わらず、損失は相変わらずであった。]

(23) 如今露易丝已经去过了五大道、天塔、动物园、科技馆、乐园 等 好多 地方，...

[今のところルイスは五大道、天津タワー、動物園、科学技術館、遊園地など様々な所に行っており、...]

(24) 这项大工程总算完成了，真不容易呀，全卷三千万字，我都一个字一个字地看过了，...

[この一大プロジェクトが何とか完成した。本当に大変だったよ。全巻で三千万字。俺は一文字一文字全部読んだんだよ。...]

これらの複数表現はいずれも質的、量的に十分な程度で行為を遂行することを表すものであるため、先述の「十分満足できる状態に至る」という含意とも意味的に合致するものと考えられる。また、“V 过”は元々「過ぎる／超える」といった意味を表す動詞の“过”が文法化を経て動詞接尾辞になったものであるが、そもそも「過ぎる」あるいは「超える」といった意味の背後には、「複数の領域」が想定されていると考えられ、この点も複数の意味を表す表現との相性の良さの要因であることを指摘した。

■第3章

第3章では、第1章及び第2章で考察した“V 过”の「経験用法」と「予定遂行用法」に関して、出来事の帰属領域という概念を導入しつつ、両者の関連性を考察した。定延 2006 は、出来事の帰属先として「場」と「世界」という二つの領域があることを指摘しているが、本稿ではこの概念を“V 过”の用法にも援用できることを確認した。具体的には、「経験用法」の“V 过”は、話し手が過去から現在までの全期間を対象とした広い時間領域を想定し、その領域における出来事の内容を述べるものであることを明らかにした。一方、「予定遂行用法」の“V 过”は、話し手が発話時現在に近い狭い時間領域を想定し、その領域における出来事の内容を述べるものであることを明らかにした。それゆえ、取り立てて大きくも小さくもないような中途半端な時間領域を想定して“V 过”を用いる場合には、「経験用法」と「予定遂行用法」のどちらとも解釈できるような中間的な表現になってしまうことも併せて指摘し、「経験用法」の“V 过”と「予定遂行用法」の“V 过”は連続体を成しており、グラデーションがあるという点も確認した。また、従来はそれほど詳しく考察されることがなかった“V 过”と共起する各種の副詞（“曾经”（かつて）及び“已经”（すでに）など）の機能についても考察を行い、それらの副詞は話し手がどのような時間領域を設定しているかという意識を反映するものであることも指摘した。具体的には、「経験用法」の“V 过”とよく共起する副詞“曾经”は、話し手がかなり大きな時間領域（定延 2006 の言うところの「世界」）を想定していることを示す手段であると分析し、「予定遂行用法」の“V 过”と共起する副詞“已经”（すでに）は、話し手がかなり狭い時間領域（定延 2006 の言うところの「場」）を想定していることを示す手段であると分析した。

■第4章

第4章では、第1章で確認した「中国語における経験とは何か」という点を踏まえ、中国語において出来事が「経験」と認識されるための条件（現在との時間的隔たり、出来事の情報価値）が他の言語、とりわけ日本語においても同じであるかどうかという観点から、日本語で経験を表す「V たことがある」という表現との比較対照を行った。

中国語の“V 过”が経験の意味で使用される場合、日本語では一般に「V たことがある」という表現に訳せる場合が多い。例えば、以下の例がそれである。

(25) 江泽民主席于 1989 年 11 月会见过他。

[江泽民主席は 1989 年 11 月に彼に {会っている／?会ったことがある}。]

(26) 因为与此同时他的一个远房表妹也在那地方看到过彩蝶。

[というのは、それと同時に彼の遠縁のいとこもそこで鮮やかな蝶を見たことがあるのだ。]

第1章で、中国語の“V 过”が表す「経験」とは、一般に現在から比較的遠く離れた、珍しい情報価値のある出来事がその対象になることを確認したが、この点に関しては日本語の「V

たことがある」においても類似した傾向があると考えられる。ただし、現在との時間的隔たりに関しては、日本語「Vたことがある」は中国語のそれよりもより遠い過去である必要があることが明らかになった（個々人の語感によっても揺れがあるだろうが、日本語ではおよそ3年程度以上前の出来事であって初めて自然に「経験」として捉えやすくなる）。また、出来事に情報価値が必要である点に関しては、日本語と中国語で共通することも明らかになった。加えて、日本語においては、中国語には存在しない「出来事の不特定性」という条件があり、唯一的に限定できる特定の出来事は日本語では経験として捉えにくく、「Vたことがある」を使用しにくいことも指摘した。例えば、以下のような例がそれである。

(27) 29年前的1月25日，发生过一场轰动全国、并具有一定国际影响的事件，这就是“1·25红场事件”。

[29年前の1月25日、全国を驚かせ、かつ国際的な影響のある事件が{起きたが/?起きたことがあるが}、それこそが「1・25赤の広場事件」だ。]

(28) 藤原兄的名字，在1923年5月8日见过一次：“上午往北大讲。见丸山及石川半山二君。晚丸山君招饮于大陆饭店，同座又有石川及藤原兄二人”

[藤原さんという名前は、1923年5月8日に一度{見ている/?見たことがある}。「午前は北京大学で講義。丸山君と石川半山君の二人に会う。夜は丸山君の招きで大陸飯店にて飲む。石川君及び藤原さんの二人も同席」]

そして、日本語の「Vたことがある」が特定の出来事に対して使用しにくいことに関して、それが「限量的存在文」の機能を有することにその要因を求めた。「限量的存在文」とは、不特定の事物の有無多少を述べるタイプの存在文であるが、日本語の「Vたことがある」をその拡張的表現と捉え、「不特定の出来事の実在を述べる限量的存在文」と考えることで、出来事の不特定性という条件に関して適切な回答を与えることができることを指摘した。また、不特定の出来事とはいわば「類」であり、客観的な時間軸上に置かれる事態とは異なる、時間を超越したものであるが、この点は益岡2013の言う属性叙述へとつながるものであり、「Vたことがある」が属性付与の機能を担うことも併せて指摘した。加えて、「Vたことがある」と「Vている」の経験用法の差異についても考察した。「Vている」の経験用法は、過去時を表す時点表現などを用いて、当該の出来事が過去のものであることを保証して初めて出てくる用法であり、その出来事の効力が現存しているという意味を表すために結果的に経験の意味が出てくるのであって、基本的には特定の出来事を叙述するという点において「Vたことがある」とはその意味機能が異なるということを指摘した。

■第5章

第5章では、第4章の考察結果を踏まえ、「経験用法」の“V过”と日本語の「Vたことがある」が有する諸特徴が、連体修飾節においても維持されることを明らかにした。連体修飾節内の出来事が、時間詞や文脈等から特定の出来事であると認識できる場合、「経験用法」の“V过”は使用できるが、「Vたことがある」は使用しにくくなる場合が多い。例えば、以

下の例がそれである。

(29) 孙悦呀孙悦，你记不得，二十多年前我在日记上写过的一句话？

[ああ、孫悦、君は覚えているかい、二十余年まえ、僕が日記に {書いた／cf. ?書いたことがある} 一説を？]

(30) 我被她的讲述，带到我当年生活过、工作过的地方，...

[私は彼女の話によって、昔、{生活し仕事をした／cf. ?生活したことがあり仕事をしたことがある} あの場所に連れて行かれ...]

上記の例は、いずれも時間詞や文脈から出来事の特定性が認識されるものであり、第4章で述べた「Vたことがある」の不特定性という特徴に抵触するものである。そのため、「V过」と「Vたことがある」が対応しなくなっているのである。逆に、出来事の特定性が認識されない場合には、「Vたことがある」も連体修飾節で使用することができる。以下のような例がそれである。

(31) 插过队的人，懂了那祈望的虔诚与恐惧。

[農村へ行って住んだことがある者はその願いの敬虔さと恐れがわかる。]

(32) 据曾经向门里窥探过的人说：这座房子外面看起来很朴素，里面的结构装修却是很讲究的，而且种了很多花木。

[かつて中を見たことがある人曰く、この家は、見た目は素朴だが、中の作りや内装はとも凝っていて、花や木がたくさん植えてあるとのことだ。]

また、第1章及び第4章で述べたように、「経験用法」の“V过”及び「Vたことがある」はいずれも人や事物に属性を付与する表現であるが、この点は連体修飾節でも同様であって、連体修飾節においては、被修飾名詞の指示対象に属性を付与することになる。このように考えることで、連体修飾節において“V过”が使用される動機についても適切な回答ができる。序章でも確認したように、そもそも中国語の連体修飾節では動詞が已然の読みで解釈されやすいため、已然義を付与する完了アスペクト助詞の“V了”や持続アスペクト助詞の“V着”などは一般に連体修飾節に現れにくい。一方、“V过”は連体修飾節に自然に生起する。本稿の観点から言えば、“V过”は連体修飾節内で単に已然義を付与するだけではなく、被修飾名詞の指示対象に対して属性を付与する働きも有しているため、連体修飾節にも問題なく生起するのである。

さらに、経験用法の“V过”のみならず、予定遂行用法の“V过”に関しても連体修飾節に現れることもあり、その場合も主節同様、「必要なことを済ませる」という意味が出てくることを指摘した。

■終章

以上の考察を踏まえて、終章では動詞接尾辞の“V过”の位置付けに関して再考を行った。

“V过”は従来、完了の“V了”や持続の“V着”と同じく、アスペクト助詞と扱われてきた。実際、動作やそれに伴う結果状態が済んでいる（過ぎ去っている）ことを表すことができる

以上、アスペク的な意味を表す機能があることは否定できないと考える。しかしながら、第1章および第2章で考察したように、“V 过”はその使用に際して、「現在から比較的遠く、かつ情報価値のある珍しい出来事であること」といった条件や、「現在から比較的近く、かつ行う必要がある行為／発生が想定される事態であること」といった条件を求めたりする。これらの条件は、完了の“V 了”や持続の“V 着”では基本的に見られないものであり、“V 过”の特異性を物語っている。また、純粋にアスペクトを表す助詞は、否定副詞の“没（有）”とは共起できず、連体修飾節にも現れにくい。第1章及び第5章で確認したように、経験用法の“V 过”は否定副詞の“没（有）”と共起でき、連体修飾節でも使用可能である。また、予定遂行用法の“V 过”は、否定副詞の“没（有）”とは共起できず、この点はアスペクト助詞と類似しているが、第2章及び第5章で確認したように、連体修飾節に使用できたり、完了アスペクト助詞の“V 了”とも共起できる。

さらに、上記のような意味的・統語的特徴に加え、“V 过”は、情報価値のある出来事への遭遇を経験と捉えて人や事物に属性を付与したり、予定された出来事を済ませたことで十分満足できる状態に至ることを示したりと、他者に様々な働きかけを行うインタラクティブな機能を持っている。そして、このインタラクティブな性質も、純粋に出来事の時間的局면을述べるアスペクト助詞とは異なる点であると考えられる。

“V 过”の持つこれらの意味的、統語的、機能的な特徴を踏まえ、本稿では“V 过”を、アスペク的な意味を担いつつも、インタラクション性の高い複合的な機能を持つ動詞接尾辞として、純粋なアスペクト助詞からは外すことが妥当であると結論づけた。